

講演二 古代山城築造の意義

講演者紹介

狩野 久（かのう ひさし）

京都大学文学部卒業。京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。奈良国立文化財研究所、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原京跡発掘調査部長、文化庁記念物課主任調査官、岡山大学文学部教授、京都橘女子大学文学部教授を歴任。専門は日本古代史、木簡学、古代都城史。

・講演二 「古代山城築造の意義」

狩 野 久（元岡山大学教授）

皆さん、こんにち。岡山からやってきました。さっきの赤司さんの大変上手なお話に聞き惚れておりまして、私の言うことを忘れてしまうほどでした。ですからレジュメに書いてあることは多少違うような中身でお話するようなことになるかもしれません。後の大西さんの話がまた長そうですので、できるだけ短くやります。短めにやらせていただこうかと思いつながら、結構長くしゃべるかもしれません。

一、古代山城の分類を問う

赤司さんの話に岡山の鬼ノ城の話がかなり出ておりました。古代山城の中でも比較的調査が進んでいる遺跡の一つかと思えます。鬼ノ城の調査に私もいろんな形で関わってきました、調査の進み具合をいろいろ見せていただけてまいりました。日本の古代山城は現在、二七ほど知られています。そのうち遺跡のわかつているのが二二あり、あと五つほどは文献に出てまいりますが、遺跡の位置が確かめられていないものです。二七の古代山城を分類いたしますのに、一般に『日本書紀』に記述のあるものを朝鮮式山城といい、記述のない物を神籠石山城と分類しているのですが、私はこの二つの分類にはそろそろおさらばをした方がいいの

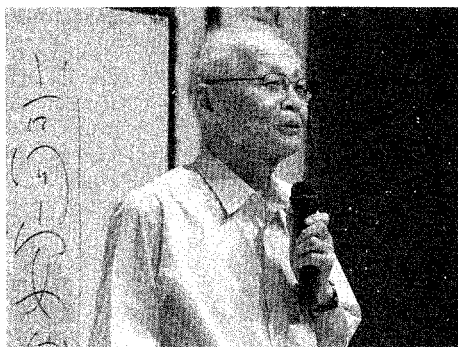


写真3 狩野 久氏

ではないかと思っております、そのことを最初にお話をしておきます。なぜそういうふうに申しますかというと、実は先ほど来お話の岡山の鬼ノ城の調査を見ておきますと、この城の築き方は大野城や基肄城、あるいは鞠智城などと比べても遜色のないお城の築き方でして、それを分ける理由がないのではないかと思うのです。高い山の上に鉢巻状に城壘を回す築城法です。それも立派な城壁です。『日本書紀』にあるものもないものというのは、『日本書紀』の編者が重要視したものだけを取り上げて後のものは採用しなかったということではありません。これを最初に申し上げたいのであります。

二、『日本書紀』の編集と大宝律令

『日本書紀』というのは養老四年（七二〇）、奈良時代になりまして完成をいたしました日本で最初の歴史書であります。実はこの『日本書紀』は天武天皇の一〇年といえますから六八一年に天皇の詔により編纂が開始され、約四〇年かかって完成をみるわけです。四〇年かかったといえますけど、四〇年ずつとやっていたわけではなくて、いろんな材料を集めながら、奈良時代に入りまして、奈良時代というのは七一〇年平城京に都が変わった時からですけれども、その時以降ビツチがあがったようであります。問題は日本書紀の編集方針なのです。どういう編集方針をとったかといえますと、文章の作り方もあるいは史実の取り上げ方も、大宝元年（七〇一）に成立した大宝律令により修飾を加えているということです。七〇一年という年は

大宝律令が發布された日本の古代国家の一大画期となる年であります。つまり、法体系に基づいて国を治めようという、そういう国が生まれた時であります。日本の歴史の中で多分、この大宝律令の發布は明治維新に匹敵する事柄であつたろうと思います。それまでの地域のボスたちがヤアヤア、マアマアと言いながら治めていた仕組みを全く改めまして、国の組織を作り、お役所を作り、諸制度を整えて国を治める体制をつくったわけでありまして、その新しい国制の知識で『日本書紀』は書き直したのです。つまりそういう新しい知識で古い事柄を記述したために、例えば、国を治めるために都から派遣される長官を国司といいます。が、国司という職名が決まりましたのは大宝令からで、それまでは国^{くに}宰^{のみこと}といました。『日本書紀』はこれをすべて国司に直したわけです。国宰と国司はどう違うのかというと、地方を治める全ての権限を与えられたのが国司であります。国宰はそんな全ての権限は与えられておりません。国司は四年間という任期をもって任地に赴くわけですが、国宰はある目的をもってその地方に行つて、例えば人口調査をするとか土地を調べるとかの目的で行つて、その目的が終われば帰ってくるのが、大宝以前の国宰であります。また国の下に郡という行政組織がありますが、この郡という文字を使うようになりましたのも大宝令であります。それまでは郡に相当する行政単位は評という文字を使つていました。郡も評も「コオリ」と読みますが、評司が民政も軍政も担当したのに対し郡司は民政のみの行政官です。しかし『日本書紀』にはこの評という字は一切使われていませんで郡という字に書き直しました。そういう話だけをしているとだいたい終わりそうになりますので飛ばしますけれど、そういうように大宝令の知識でもって書き換えたわけです。そういうことを山城についてみてみますと、特に先ほど来お話のありました瀬戸内沿いの鬼ノ城やいくつか城がございましたね、山口県の石城山（城）とかいろいろございます。そういうものについては、大宝令で廃止になるので

す。それはどうしてわかるかというと、一番最終の城は高安城たかやすのきですね。奈良県の平群町・三郷町にあります高安城です。

三、高安城廃止の意味

この高安城を廃止したのが大宝元年。つまり大宝令の発布とともにこの高安城は廃止になりました。一番最終の城の高安城を廃止したということは、先ほど来、赤司さんの図にもありましたように九州からはじめて瀬戸内海、最終の高安城までずっと並んでおります城による防衛のやり方をやめたということです。少なくとも瀬戸内海から高安（城）の間については。九州はやはり西の防衛拠点ですからこれを廃止するわけにはいきません。だからこれは残しましたけども、瀬戸内海から高安城までは廃止いたしました。それに伴って、廃止になった城については、『日本書紀』は取り上げないことにしたのです。ですから鬼ノ城とか石城山（城）とかそういうものはあがってきません。

四、屋嶋城と長門城の特殊性

ただ、瀬戸内の城の中で二つだけ『日本書紀』が築城の記事をあげておりますのが、屋嶋城やしまのきと長門城ながとのきです。この二つについては『日本書紀』は築城のことを書いているわけです。何故、この二つだけ取り上げたのかというと、この二つの城は大宝令で廃止しなかった。瀬戸内海の関門の地にある長門城は、瀬戸内海の関所でありますからこれを廃止するわけにはいかなかった。それから屋嶋城はちょうど瀬戸内のど真ん中に位置しております、屋嶋は内海に突き出た地形をしておりますから西も東も非常によく見渡せるのです。屋嶋

城と長門城は内海の枢要な城としてその後も残した。皆さん、瀬戸内海を舞台にした源平の合戦を思い出して下さい。一の谷から逃げてきた平家は、平宗盛が天皇を擁して一番はじめに落ち着いたのは屋嶋ですよ。屋嶋を追い払われた平家が落ちのびたのが長門です。屋嶋にも壇ノ浦があります。壇ノ浦の壇は、これは『古事類苑』にそう書いてありますけど、団の「だん」です。団とは何かといいますと軍団です。軍団が置かれていた浦、浦っていうのは入り江になっている地形ですね。船が泊められるそういう場所が壇ノ浦です。この二つについては後まで残ったので、『日本書紀』はこの二つについては書きあげたのです。こんな考え方がダメでしょうか？あんまり承認されていないのですが、『日本書紀』の編者は城についての、その当時の政府の記録をちゃんと手元に持っていました。それ無しに、いつ城を築いたとかは記事にできません。それは、城冊帳じょうさくちやうとでもいふべき帳面が政府の公式記録としてあって、それをもとに『日本書紀』の編者はいつ何年にどういう城を造ったのだということを書いているのだと思います。敢えてそんなふうに申し上げますのは、東北の蝦夷征伐のお城は『日本書紀』に詳しく書いてあるのです。新潟の淳足むねたり柵とか何とかの柵とかね。三つか四つ、『日本書紀』はあげております。それから『続日本紀』には多賀城以下、もっとたくさんの城、城柵の名前が出てきます。それはまさに『日本書紀』、『続日本紀』を作った段階に於いて、城が生きているからです。蝦夷征伐は延々と続きますから。というようなことを考えております。ついでにもう一つ言いますと、屋嶋城については、讃吉（岐）国山田郡屋嶋城と郡名まであげて『日本書紀』に出ているのです。郡名まであげているということは、讃岐国に郡名を異にする城がいくつかなければそんな郡名まで書く必要はない。さっきの表にありましたように、讃岐城山さぬきのきやまという立派な城が讃岐国にはもう一つありまして、あれは綾あや（阿野ぐ）郡んという違う郡の城です。二つあるからわざわざ郡名まで書いて築城記事をあげている。そうい

うことでありますので、私は『日本書紀』に記載のものを朝鮮式山城、それ以外のものを神籠石山城というのはやめた方がいいのではないかということを、まず最初に申し上げたいのでございます。

五、機能からみた分類——守固城前線基地型の城——

それならばどういう分類がありうるのか、これは考古学の調査があちこちで盛んに行われていますのでその成果をもとに分類するのも一つの方法です。ですからあまり簡単に分類をするのはいかかとは思いますが、考古学者は非常に慎重に発言しますので新しい分類法の提起がありません。資料篇一五頁になりますけど築城の目的を書いている二番目に、城の立地縄張りからみた城の分類として、まず守りの堅い城があげられます。守固城と命名しました。日本語としては熟しませんけどこれは軍防令という軍備のことを規定した法令の中に守固城という言葉が出てまいりますので、あえてその言葉を使わせていただきました。これは、鞠智城も含めて入ると思いますけど、大野城や基肆城や鬼ノ城のように山の上に、鉢巻状に城壁を造る、そういうような城のことです。つまり守りが堅く、何かあれば籠城できる城です。もう一つは前線基地型の城です。私は小学校六年で終戦になりましたから軍隊の経験もありません。あまり軍隊のことに踏み込んで申しますと今日お見えの年配の方にはそんなことは言えないと言われるかもしれませんが、前線基地型の城というのはどういうものかというのと、これもさつき赤司さんの話にもありましたが、資料の下のところはこのための表をあげておきましたのでそれを少し見てください。これは赤司さんの表の方がわかりやすいのかもしれませんが、向井さんとおっしゃる古代山城の研究会を組織しておられます方で、大変熱心に古代山城を歩いておられる方ですが、その方が作られた表の一部を使わせていた

いたのです。そこで他のところは見ていただかなくていいのですけど、三番目の欄に最低比高というものをあげております。最低比高というのは、城壁が周りの土地に対してどのくらいの高さにあるかということを言っているものであります。そうしますと例えば、三番目の鬼ノ城などは二三〇メートル。つまり周りの地形に対して城壁線の高さが二三〇メートルの高さにあるということです。城壁線にも高低差がありますから一番低い城壁線が二三〇メートルという位置にあるという意味です。これに對しまして五番目の愛媛県の永納山などは一五メートル。城壁の一番低いところが一五メートルです。九州の神籠石系といわれている城について見てみますと、女山ぢやまが四メートル、鹿毛馬かのまは〇メートルですから、城壁線の一番低いところが山麓まで下りているわけです。帯限山おびくまやまが九メートル、おつぼ山も〇メートルです、杷木はぎは八メートル、唐原とうばるは〇メートルですから、これらはその城の中に逃げ込んで身を守ることでできる城ではございません。これらは城の前を通る敵を打つための城です。すぐに敵を打てるような位置に城壁を構えているわけでありまして、そういう意味で前線基地と名づけました。大野城の一番低いところが一四〇メートル、金田城かねたのきが二七メートル、そして鞠智城が四五メートル。これはどこでどう計るかで多少違うかもしれませんが、さつき赤司さんもおっしゃったように鞠智城は比較的低い平坦面を利用して城を造っているということの具体的な中身です。このように古代山城を機能面から二つに分けて考えてみたわけです。皆さんに受けいれてもらえる分類かはわかりませんが、今日まずはじめにこれを提案させていただきました。

六、山城の築造と軍政改革

山城の築造の目的といいますのはそういう二種類の城を造ることにあるわけですが、そこに書いてありま

す通りやはり軍制改革の一環としてこういう城を造ったというのを考えておかなければいけません。ただ、百済の兵法博士の指導で白村江の戦いで負けて慌ててこういうものを造ったというものではなくて、やはり軍制改革の一環であります。と申しますのは、白村江の実戦の様子を『日本書紀』でみてみますと日本軍は誠にお粗末な戦争をしています。太平洋戦争の特攻隊の突っ込み式の戦争の仕方です。『日本書紀』に戦争の様子を書いておられます記事の中に、戦争に参加した滋賀県の近江の豪族が、どういう形で戦ったのかといえますと、[「]氣象を見ずして白村江に突つ込んでいつた[」]とあります。氣象というのは天氣の氣象ではありません。敵の陣地の構成の仕方とか、敵軍の配置の仕方とかそういうようなものを総称して氣象といっているのです。ですから[「]氣象を見ずして[」]突つ込んでいったものですから、たちまちにやられ、白村江は血の海に化したわけです。もちろん日本もその以前から国内では筑紫君磐井^{（つきのきみいらい）}の反乱があつたり、朝鮮にも出陣し、騎馬戦をしたりとかかなりの戦争の仕方を学んできたと思いますが、しかし、陣列の組み方とか戦法とか戦争のやり方とか、やはり相当、唐とか新羅の軍に劣るところがあつたと思うのです。この戦争を機に軍政を改革するというのが天智・天武両天皇の時代の国策の一番の課題であつたわけであります。天武一〇年（六八一）の詔に「^{まつりごと}政の要」は、つまり政治にとって一番大事なことは軍事であると述べています。それも山城を築きながらやつたのだと思います。兵制官、すなわち後の兵部省にあたります軍の役所を中央の組織として作りました。それから武官だけではなく、文官、すなわち軍事に携さわない官僚に対しても軍事教練をしました。兵器や馬の検閲や教習を行いました。それから諸国には陣法^{じんぽう}、陣法というのは陣の組み方、戦争のやり方ですね、これを教えました。天武天皇の時代にこれらを次々とやっております。これは山城の築城とほぼ同じ時期に並行してやられた、日本の古代軍事組織を新しくしていく施策でありました。

七、築城の労働力と庚午年籍の作成

先ほど山城を二七造ったと申しました。これをほぼ同じ天智朝の時期に造りはじめて天武朝の時期にかなりずれ込んで一応出来あがったと私は思います。これは膨大な仕事量ですね。先ほど来、土塁の話とかいろんな話がございましたでしょう。土塁を高さ七、八メートルに築き上げる工事だけを考えても、これはただ単に土を積み上げるだけじゃあないのですよ。土をつき固めて築き上げる、その労働力というのは大変なものです。石工の技も必要でありますし、いろんなことが必要でした。そういうことを実現するためにたぶん西日本の人たちだけの力ではとても出来なかったと思います。たぶん、この西日本の山城築城には今後そういうことが発掘調査によりわかるようになってこないかなと期待しているところです。全国各地で作った土器などが出てくるとそれは証明されることになると思いますが、東国の人たちも含めて動員されたのではないかと考えています。西日本の人たちは白村江の戦いで動員されており、生きて帰った人もおりますけど、かなりあの戦いで死んでおりますから、そういうことを考えますととても西日本だけでやれるようなことではございません。こうごねんじやく 庚午年籍という天智天皇の時代に作った全国的な戸籍があります。この戸籍を作った目的は何かという、各戸から成年男子、働ける男を徴発するための帳簿作りです。戸籍を最初につくったのはまさに天智九年（六七〇）でして、山城築城を盛んにやっていた時期であります。庚午年籍は大化の改新の流れの中でこの時期にようやく出来あがったという意見がありますが、私はむしろ、そういう現下の必須の要請がなければ以後長く戸籍の原簿となる戸籍づくりはできなかったと思います。私は山城造りと庚午年籍づくりは密接に結びついたものだと考えております。

八、鞠智城の特性

肝心の鞠智城について何か言わなければいけないのでありますが、もう時間がなくなりました。それでも一つだけ申し上げたいのは、三年ほど前の東京でやりましたシンポジウムの時に古閑三博さんがごあいさつで言っておられたことがある。それは阿蘇山のことです。この山が『隋書倭国伝』に出てくることに注目されて、倭国伝は確かに倭人の生活様式とかいろんなことが書いてあるが、突然阿蘇山のことが出てくることに注目がすることの不思議さと、阿蘇山が当時の中国人にとさらに意識されていたことに触れておられます。それは隋書だけではなくその前の『北史』という歴史書にも阿蘇山のことが出てまいります。火を噴き出す怖い山で霊山であるということが中国の史書に書かれているわけですね。私は阿蘇山と鞠智城の関係も無視してはいけないのではないかと思います。阿蘇の山は火を噴く怖い山でありますけど、同時に菊池川も白川も、あるいは筑後平野の筑後川も水源は阿蘇なのです。ですからこれは水田開発の一番元締めのを祀る山でもあります。そういうものと鞠智城が近接してあるということもここに城を構えた一つの理由ではないかと考えます。最後の結論だけ申しますと、従来からいわれておりますように、大野城、基肆城の兵站基地的役割が当初の鞠智城の築城の意義であつたのではないかと思います。もちろんそれだけでこの鞠智城の存在意義は解けるものではありません。最後に鞠智という城名について。くくちというは大変難しい字ですね。今は花の菊を書くのですが、これはくくちという地名を漢字でどう表現するか苦心した『日本書紀』の編者の知恵ではなかったかと思えます。この鞠という字は「養う」という意味ですね。知恵を養う、これは大変素晴らしいお城の名前じゃないでしょうか。それは「くくち」という地名を漢字でどう表現したわけですが、そこにこの漢字を採用した『日本書紀』の編者といえますか、当時の人たちの

この城にかける思いというものも私は感じるわけであります。

まとまりのないお話で失礼いたしました。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。